

第45回保育学会 企画シンポジウムⅢ 報告

新しい歴史学の動向と保育研究の出会い

森下みさ子

保育学における歴史研究の検討は、本大会企画シンポジウムをもって三回を数える。第一回は一九八七年に『近代的孩子の誕生』と題し、子どもの病や捨子の養育、育児書、絵草紙などをめぐって、近世から近代への移行過程にみられる「子どもへのまなざし」をさぐる試みに始まった。続いて一九九〇年には、『近代化と母性』をテーマに、出産、授

乳、墮胎・間引きなどから「母子関係に注がれる社会的な認識の変容」が論議された。こうした試みにおいて至近距離から少なからぬインパクトを与え続けていたのが、「新しい歴史学」といわれる民衆史へのとりくみであったといえる。そこで第三回を迎えるにあたり、子どもを媒介に民衆史へと興味深いアプローチを展開している方々を保育学外部からお

招きし、私達の試みとの接点をさぐりつつ、子どもをめぐる歴史研究の可能性について討議の場を設けることになった。

まず歴史学の動向において何をもって「新しい」とされているかであるが、少なくとも二つの観点があげられよう。ひとつはあくまでも「匿名」の民衆が研究対象となるということ、もうひとつはそういう人々が「日常的」に行ってきた行為、ひいてはその奥で「無意識裡」に共有していた感覚をさぐるということである。これはすなわち従来の歴史学の中心にあった制度史を相対化する試みといえる。その際、子どもをめぐる事象および育児によせる感覚は、制度史の枠外にあって多くの人々が日常的に行ってきたことであるがゆえに、新しい歴史学の組上へと必然的にのぼってきたのである。こうした視点から前近代の子ども・若者・女性に焦点をあてた民衆史を、墓碑・日録・口承・絵馬などを駆使して浮かび上がらせようとしておられるのが高橋敏氏

(国立歴史民俗博物館)である。高橋氏の研究は『日本民衆教育史研究』(未来社)にはじまって民衆の読み書きの歴史を掘り進めた昨今の著書(『国定忠次の時代』平凡社)、および民衆史の先駆ともいえる高井浩の方法(『天保期、少年少女の教養形成過程の研究』河出書房新社)を再評価する仕事にいたるまで、教育史に新風を吹き込んでいる。また、発達心理学者として科学的研究を錬磨してこられた小嶋秀夫氏(名古屋大学)は、その傍ら近世に書き留められた育児日記を素材に、子どもの発育と家族および近隣社会の関係を読み解く作業を進めてこられた。この研究が『子育ての伝統を訪ねて』(新曜社)にまとめられ、心理学者のもうひとつの仕事として私達の手元に届けられたことは記憶に新しい。このお二人をゲストにお迎えし、保育学内部からは第一回のシンポジウムからかわってこられた皆川美恵子氏(十文字学園女子短期大学)に壇上にあがっていただいた。近世に希有な日記資料を見

いだし、病・玩具・食べ物など独自の観点から子どもをめぐる記述にほどこしてきた繊細な分析と表現（『わたしたちの江戸』新曜社、他所収）は、新しい歴史学との照合がつとに望まれたからである。指定制論者には、一人の人物（飯島半十郎）の広がりにおいて子ども史をたぐる試みに専心してこられた小林恵子氏（国立音楽大学）をたのみ、保育学の領域に新しい歴史研究を随時とりこみつつ研究成果を発表してこられた太田素子氏（郡山女子大学）に司会の任をとっていただいた。

以下に各シンポジストの話を概観し、シンポジスト間の、あるいはフロアからの質疑応答を加えて、日本保育学会第45回大会企画シンポジウムⅢ「新しい歴史学の動向と保育研究の出会い」の報告としたい。

◇文字支配によらない学校外の教育―高橋氏

従来の教育史は学校教育における子どものみを対

象とすることが多かったが、六〇年以降めだつてきた教育の危機を見るにつけ、学校教育が排除してきたものを注視する必要があるようになった。たとえば、「悪たれ」と呼ばれるような子ども本来のエネルギー、それを生かした形で行われる民俗儀礼、およびその組織運営をとりしきる子どもだけの集団のありよう、また共同体が認める「一人前」の要件やそれを実践する若者たちの組織など、民俗学的フィールドワークを援用することで「ウラの教育」ともいえる隠れた歴史の層があらわれてきた。子ども組や若者宿を機関として継承されてきた教育は、文字を介さず、自然と密に接し身体を伝承の媒体とすることに於いて、学校教育とは対照的な位置にある。もちろん文字文化がもたらす意義も評価しなくてはならないが、文字化がおよぼす支配の構造、試験制度にみる能力判定の偏重とそれによる差別化など、見過ごしてはならない問題が蓄積している。文字を重視した学校教育の浸透にともなつて失われた

ものは、いったい何だったのだろうか。民衆に伝承されてきた無文字の教育が担っていたものを見直す必要を感じる。特に高度経済成長に鼓舞した六〇年以降、文字・学校・試験教育一辺倒の圧力が教育の逼塞を招いたように思われる。オモテ（学校教育）とウラ（民衆の教育）との拮抗関係こそが模索されるべきであり、そのためにも村落共同体においてちかわれてきたウラの教育の様態を、歴史的にさぐっていかなくてはならない。

◇おばあちゃんの心理学のありか―小嶋氏

「育児」という人間に普遍的でかつ日常的でもある営みにおいて、私達はいくつかの層で接していると思われる。経験者のアドバイス、子育てのノウハウを表した本、学問・研究分野の成果とそれに基づくエキスパートの卓言などが考えられよう。しかし、それらの古層には長期にわたって多くの人々が

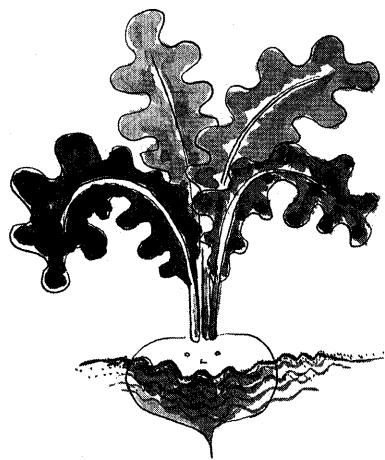
共有してきた漠とした知識・イメージの蓄積があるのではないか。育児に関する様々な対処の仕方、実はこの古層から取り出され変形され、それぞれの表現をまとめているにすぎないのかもしれない。「常識」「伝統」あるいは「おばあちゃんの心理学」ともいえるEPI (Ethno Pool of Idea) なるものを想定してみたい。時代・社会の変容にもない、育児方法は表面的には多様性・関係性をもって広がり変化していくように見えるが、根においては普遍性をもったものとしてとらえられると思う。子どもの歴史をさぐる試みは、こうした文化の積層とその奥の普遍部分を探求していくことに直結しているのではないだろうか。

◇歴史Ⅱ物語を産む「子ども」―皆川氏

歴史研究に手を染めたきっかけは、近世にしたためられた書簡体の育児日記という魅力あふれる資料

との出会いに求められる。のちに「桑柏日記」と名付けられたこの資料は、桑名と柏崎という離れた場にあつて、家族がそれぞれの暮らしを記録しつつ物語化し伝え合うという、距離をもって密に影響しあう語りのダイナミズムに支えられている。そこに深く関与し、その複雑なおもしろさを産む基となっているのが「子ども」である。そこには目の前の子どももの挙動を読み取り、ディスクールへとひきあげる緊張関係がうかがえるのだ。歴史とは物語であり、距離をもつことで物語る歴史が日々産まれてくるのだと考えるとき、大江健三郎氏の話（大会記念講演「物語のはじめと子供」にあつたように、物語るべく他者との間に自由に対等にいきかう水平関係が求められると思う。近世社会の水平的人間関係およびそこでなされた子育ては、その重要性を告げられるものでもある。

*



以上、各シンポジストの話題提供を受けて、小林氏から以下の三点が問いとして投げかけられた。

- ① 共同体のもっていた教育力を現代においていかに組み込むか
- ② おばあちゃんの心理学の継承はどのようにして行われるのか

③子どもの病に着目した研究はどのような成果を産んだか。

続けていくつかの質疑応答と話題の展開が壇上とフロアの両方から活発に行われた。個々のやりとりの詳細は紙面の都合上省略させていただくことにし、小林氏の質問と合わせて、各テーマを開きつなげる方向で交わされたいくつかの論点を次に紹介する。(中身については、各シンポジストの発言はもとより、司会者の的確な指摘と整理、指定討論者の発展性をもったまとめによるところが大きい)

◇共同体における民衆の教育と現代社会との関係をどうとらえるか◇

共同体が担ってきた教育は、共同体内部の組織に帰属し、村落内の災害や生産、儀礼などに参加する形で行われてきた。その際、媒体の役を果たしたのは口承および身体であり、文字ではなかった。文字は学校教育の徹底にもなって共同体外部から来た

らされた支配力といえる。現在にいたってようやく文字支配が産む画一的な差別化が指摘されかつての共同体の教育が問い直されているが、表面的な回復は一時的なヤラセにしかならず、むしろ外部の支配におもねることになりかねない。過去にもどろうとするのではない再構成の方法をさぐらねばならない。その際留意する点として、近代において輸入された学校教育の歴史をあらいなおしてその歪みをとらえること、現代社会から排除されつつある肉体労働の意味を問い直すこと、また身体性を有し実体験と結び付いた文字教育を模索していくことなどがあげられよう。

◇おばあちゃんの心理学はどのように継承されるのか、またそれはどのような史料にさぐる事が可能か◇

現代においておばあちゃんの心理学が正論として認められてきた感がある。むしろ心理学研究は、科

学的根拠・因果論的理由付をもつてその検証に向かっているともいえよう。このようなおばあちゃん
の知恵なるものが文字資料に現れてくるようになる
のが近世ではないか。共同体から離れた小家族の成
立とともに育児に関する知識が求められるようにな
り、その手のエキスパートの出現と文字を媒体とし
たより広い伝搬が可能になったと思われる。その
際、文字にしたためられた中身は多分に民俗的習慣
を含み、民衆が共有してきた知恵を伝えるもので
あって、かなり普遍性を抱えていたのではないか。
むしろ、核家族が主流になる六〇年以降、そうした
知恵およびその伝搬に変化が生じているのかもしれ
ない。

◇「子ども」について語るといふことをどうとらえ
たらよいか、病に焦点をあてることはどう結び付
くか◇

「子ども」が介在することで類いまれな物語性を

もちえた歴史資料がある。そこには目の前の子ども
と水平関係をもって交信しあうことで産まれてくる
物語と、離れた他者に「子ども」を語ることでつむ
ぎだされてくる物語とが共にいきづいている。身体
を介した物語と文字記述による物語の相乗におい
て、歴史が生氣を帯びてとどめられているのであ
る。子どもの病は、その身体とより密に語り合う契
機となるとともに、他者に語るドラマ性を発揮す
る、日常にあって日常を超える物語の支点といえよ
う。また、私達研究者と歴史資料との間にも語りの
ダイナミズムがあり、生きられた歴史をその生氣を
失うことなく物語る力が試されているのではないか。

*

以上に見るとおり、ゲストを迎えての論議は多方
向にわたり、それだけ多くの課題を産み落とした。
企画当初から概念の規定や方法の確立にこだわらず
に、それぞれが抱えている問題・関心を広げ、歴史

